

「4分の3」の壁

組原 洋

1990年2月6日、ペラウ（パラオ）で、自由連合協定の是非を問う第7回目の国民投票が実施された。ペラウは周知のように非核憲法を持っているが、アメリカと政府間で結んだ自由連合協定は、簡単に言えばアメリカに軍事決定権を委譲するものであり、憲法2条3節・13条6節により、国民投票において、投票者の4分の3以上の承認を必要とする。アメリカは自由連合協定の承認と引き換えに独立を認めるという立場を取っているため、ペラウはいまだ国連信託統治領のままである。

1989学年度のI部法人類学演習でペラウの憲法をテーマとして取りあげたときも、まず、この独立しているのか否かというところで最初からつまづいた。実際、独立しているという前提で書かれた文献もあったのである。現場に行き書かれたもののなかにも簡単に「独立した」としているものもあり、当惑させるに十分だった。この段階で「現在情報」、「現地情報」の不足を圧倒的に痛感させられた。それは「行くしかない」と直ちに決断させるほどのものだった。そういうことで、ゼミ幹事をやっていた赤嶺智君と初めてこの地を訪れた。11月のことである。現地に行ってみたら、当然だろうが、事情はすぐに飲み込めた。同時に、わけが分からなくなってきた。というのは、人々があきらめかんとしているのである。「政治的」な感じがほとんどしないのである。ともかく色々な人に聞き取り調査をしているうち、部落の意思決定構造というものも今でもきわめて重大な要素になっていることは実感できたのである。それで、沖縄に帰ってからも、そのあたりのことをできるかぎり文献で調べていた。

90年の1月も末になって、知り合いになった現地の人からファックスが入って、第7回目の投票日が分かった。やはり、日本にいたのではなにも分かりそうになかった。マスコミは全然取りあげないのである。「行くしかない」と今回も決断せざるをえなかったのである。期末試験やら入学試験やらが詰まっている時期で、苦しい日程だったが、赤嶺君のほか、ゼミに所属していた森幸恵さんと加納麦子さんも同行することになった。我々よりはちょっと遅れて、長嶺弘善さん（現琉大非常勤講師）も参加した。今回の投票は最後のものである、というようなことをアメリカはほのめかしていた。グアムの空港で読んだ新聞でそのような感触を得た。いよいよだな、ということで緊張して着くと、投票前夜のコロールはしーんとしていた。翌日、投票場をいくつか回ってみたが、やはり穏やかな空気だった。過去、この件をめぐる幾多の暴力沙汰等があったことから考えると意外だった。開票作業は投票当日の夜から始まったのだが、結果はなかなかでなかった。しかし、今回もどうやらノーらしいということはじきに分かった。実際、開票前にも色々な人に聞いたが、そろって「ノー

だろう」という返事で、結果は皆分かっている感じだった。9日に私と赤嶺君は先にベラウを離れたが、その時点ではまだ最終結果は分からなかった。15日に最終結果が発表されたようで、それによれば、イエス票は60・8%（投票率は68・7%）だそうである。この数字は、1983年2月10日の第1回投票以来最低である。

まさかこれで終わりということはないだろう。今度は、憲法の4分の3以上というのを過半数に変えようという方向で動き始めているという風に聞いているがさあどうなるのだろう。

このようにして非核憲法は維持されているのだが、これまでこの件を追っていていつも、4分の3ということと、過半数ということの違いの大きさを感じ続けてきた。ベラウでは、「噂は限りなく真実に近い」ということを2回の訪問で痛感したが、そういう社会における民主主義のあり方との関連で興味を感じている。

2回のベラウ訪問については、既に赤嶺君が、1990年6月8日付けのレキオで詳しく書いているので、それを参照されたい。

それから、最近になって太平洋地域に関連する文献が次々出版されるようになってきている。そのなかで、澤地久枝「ベラウの生と死」（講談社・1990）の最後の章「未来への「架け橋」」には、第7回目の投票前後のことが書かれている。

（1990・12・7 脱稿）